

海外における批判仏教の影響

松 本 史 朗

私は、今年の6月19日、韓国の聖公会大学校の柳済東 Ryu Jeidong 教授から、*Pruning the Bodhi Tree, The Storm over Critical Buddhism* (Jamie Hubbard & Paul Swanson, eds., University of Hawai'i Press, 1997) の韓国語訳の惠送を受けた。*Bolisu Gajichigi* (CIR, 2015) がそれである。大変美しく装丁された立派な書物を手にして、感銘を受けざるを得なかった。

私が、Ryu Jeidong 教授と知り合ったのは、昨年2014年3月28日の金剛大学校での印度哲学会の学会後の懇親会の席であったが、その席で、教授は、*Pruning the Bodhi Tree* を韓国語に訳したので、出版したいと言われた。私は、*Pruning the Bodhi Tree* のような大冊を教授がたった一人で翻訳されたという事実に驚いたが、出版については、この書物の編者のお一人である南山大学の Paul Swanson 教授に連絡すべきであるとお話した。その後、わずか一年余りで、Ryu Jeidong 教授による *Pruning the Bodhi Tree* の個人訳が見事な形で出版されることになり、それを手にした私は、感慨を禁じ得なかったのである。

この翻訳書の冒頭には、Swanson 教授と *Pruning the Bodhi Tree* に論文を寄稿されている台湾国立政治大学教授の林鎮国教授、更に私による三つの推薦文が載せられている。

まず、Swanson 教授の推薦文は、次の通りである。

“Preface to Korean translation of *Pruning the Bodhi Tree*”

It was with great pleasure that I learned of a completed Korean Translation of *Pruning the Bodhi Tree*, a collection of essays edited by Jamie Hubbard and myself on the controversial movement known as “Critical Buddhism,” first published in 1997. The collection aimed to provide not only translations of works by Hakamaya Noriaki and Matsumoto Shiro, the two Japanese scholars whose confrontational statements regarding the heterodoxy of ideas such as Buddha-nature and original enlightenment defined this “movement,” but also include discussions on this topic from various perspectives by

scholars of many different backgrounds. I am also happy that the book seems to have spurred debate around the world, including Korea, Taiwan, mainland China, the United States, and Europe.

It is no doubt superfluous to even say that the idea of Buddha-nature 仏性 and original enlightenment 本覚 is also very important for Buddhism in Korea. One need only look at the influential work of Wōnhyo, for example, and his commentary on the *Awakening of Faith*. Or one may mention the intriguing case of the advocacy of original enlightenment in the *Vajrasamādhi-sūtra* (K, *Kūmgang sammae kyōng* 金剛三昧經), an apocryphal yet influential text that may have been composed or compiled in Korea. I think it is imperative for contemporary Korean Buddhists and scholars to examine these issues, such as the historical importance of Buddha-nature and original enlightenment, and reconsider the impact these ideas have had on contemporary Korean society.

Again, I welcome an open discussion that compares the social impact of these ideas with that of Japan. Can it be said that the “original enlightenment” ethos encouraged social discrimination and reliance on the status quo in Korea, as Hakamaya claims for Japanese society? Or was Buddha-nature thought useful, as pointed out by Sallie King in this volume, to justify social engagement and compassionate action to transform society in Korea? Such a comparative analysis would clarify the influence of these ideas on different societies and cultures in different historical eras, and lead to deeper understanding of their potential power,

Finally, I want to thank Dr. Ryu Jeidong for his work and commitment to translate this entire volume into the Korean language. May his work bear fruit through encouraging avid discussion, and lead to a deeper clarification of these issues.

次に、林鎮国教授の推薦文は、次の通りである。

〔批判仏教與双重啓蒙〕

仏教追求双重啓蒙——勝義啓蒙與世俗啓蒙。對於大乘仏教來說、若無世俗啓蒙的實現、就沒有勝義啓蒙的完成。八十年代出現在日本、由曹洞宗學者提出的「批判仏教」、其重點就是批判某些仏教思想造成世俗啓蒙的失敗。他們的批判將此失敗歸因於東亞仏教的主流教義——如來藏思想以及建立在如來藏思想上的一些教派與哲學、如《起信論》、禪宗和京都學派哲學。他們稱這類如來藏思想為一元論式的「基體論」、在社會與政治實踐上造成無法肯定多元價值與秩序

的後果。

「批判仏教」此論一出、立即引發日本仏学界内部的批評與責難、也引起國際學界的注目、本書即是北美學界的回應。其後、東亞仏教學界（包括台灣、中國）都陸續提出了回應。這些回應很多是從仏教内部的教義爭論切入、說明「批判仏教」在仏教教義層面的確是傳統爭論的延續。但是、這次的「批判仏教」爭論出現在八十年代、帶著和歷史上仏教内部論爭不同的性質。那就是、針對現代性議題的後現代思潮、包括重提戰爭時京都學派參與的「近代的超克」論題、仏教不能置身事外、必須在立場上有所清楚表示。

在八十年代出現的「後／現代性」論述、針對戰後所提出的樂觀的、進步的「現代化」理論、試圖透過知識論式的考察、對來自西方的「現代性」進行系譜學分析、揭示其時間性與歷史性、以解除其普世性的迷思。這種批判性的反省來自不同的歷史處境和意識型態立場、各有不同的解讀與對治性方案。宗教也不例外、和儒家、伊斯蘭、印度教一樣、仏教也必須在思想和實踐上對於現代性議題（民主、人權、性別、環境、全球化）提出回應。對於仏教來說、這是「世俗啓蒙」的課題。Jürgen Habermas 則稱為「啓蒙方案」的課題。從仏教的觀點來看、「啓蒙」（Enlightenment）具有雙重意義：宗教上的覺悟與近代歐洲啓蒙運動的批判精神。前者是勝義啓蒙、後者是世俗啓蒙。大乘仏教主張「生死即涅槃」、就是主張勝義啓蒙的實現無法脫離世俗啓蒙的完成。「批判仏教」的爭論應該從這「雙重啓蒙」的視角來審視。

この林鎮国教授の推薦文を、仏教学部の程正准教授に、以下のように和訳して頂いた。ご尽力に深謝したい。

「批判仏教と二重の啓蒙」

佛教は二重の啓蒙を追求している。二重とは勝義啓蒙と世俗啓蒙のことである。大乘佛教にとって、世俗啓蒙の實現がなければ、勝義啓蒙の完成はない。20世紀80年代、日本曹洞宗の學者らによって提起された「批判佛教」は、ある一部の佛教思想がその世俗啓蒙に失敗をもたらしたことを批判したところに重みを置いたものである。彼らによる批判は、その失敗の原因を東アジア佛教の主流教義——如來藏思想及びそれに基づく一部の教派と哲學、例えば『起信論』、禪宗、京都學派哲學など——に帰着させたものである。彼らはこうした如來藏思想を一元論式の「基體論」と位置づけた上で、それが社會と政治の實踐において多元的價值や秩序などを認め得ない、という結果をもたらしたとい

うのである。

「批判佛教」の学説が登場するや否や、日本の學界（佛教學）の内部よりの批評が巻き起こり、また世界各國の學界（佛教學）から注目された。本書はまさに北米の學界（佛教學）より出された返答なのである。その後、東アジア（台湾・中国を含む）から、陸続として返答が提出された。こうした返答の多くは、佛教内部における教義論争を切り口とし、佛教教義のレベルでは「批判佛教」が確かにこうした傳統的教義論争の延長線上に位置づけられるとするものである。しかし、このたびの「批判佛教」に関する論争は、20世紀80年代に発生したもので、従來の佛教内部における教義論争とは異なる性質を帯びているのである。それは、「ポストモダン」の思想傾向としての現代的議題に對し、戦時中、京都學派がくみした「近代の超克」の問題を再び言及することを含めて、佛教は身を局外に置くのではなく、自らの立場を明確にしなければならないのである。

80年代に出現した「ポスト／モダニティ」の論述は、戦後に提起された樂觀的、進歩的な「現代化」理論に對し、知識論的考察を通して、西洋（歐米）からの「現代性」に系譜學的に分析を加え、その時間性と歴史性を明らかにすることをもって世間の迷妄を解決しようと試みたものである。こうした批判的反省は、異なる歴史の境遇や意識形態や立場などに基づくもので、また異なる見方や対治のプランを有しているのである。宗教も例外ではない。儒教、イスラム教、ヒンドゥー教などと同様に、佛教も思想と實踐の兩方において現代性議題（民主、人權、性別、環境、グローバル化）に應えなければならないのである。佛教にとっては、これこそ「世俗啓蒙」の課題なのである。Jürgen Habermas がこれを「啓蒙プラン」の課題と稱している。佛教の立場からすれば、「啓蒙」(Enlightenment)には二重の意義がある。すなわち、宗教上における覺悟（さとり）と近代ヨーロッパ啓蒙運動の批判的精神の二つである。前者は勝義啓蒙で、後者は世俗啓蒙である。大乘佛教における「生死即涅槃」という主張は、まさに世俗啓蒙の完成ができなければ勝義啓蒙の實現が不可能であることを意味するものである。「批判佛教」の論争は、やはりこの「二重の啓蒙」という角度から檢證すべきなのである。

さらに私の推薦文は、次の通りである。

It is my great pleasure and honor that *Pruning the Bodhi Tree: The Storm over*

Critical Buddhism (Jamie Hubbard & Paul Swanson, eds., University of Hawai'i Press, 1997) has been translated into Korean by Professor Ryu Jeidong. It seems that the book, in which the problems concerning Critical Buddhism are discussed by many scholars, has made a considerable impact on Buddhist scholars and philosophers around the world.

What, then, is Critical Buddhism? Professor Hakamaya wrote that “criticism alone is Buddhism.” However, this assertion by Professor Hakamaya may be rather difficult to understand. What is the meaning of the word “criticism”? What is the object of criticism? The object of criticism is stated by Professor Hakamaya to be original enlightenment thought, Zen, and topical philosophy. For my part, I have asserted that, theoretically speaking, Tathāgatagarbha thought, or Buddha-nature thought, is not Buddhism. However, I must admit that the validity of my assertion has not yet been fully proved by detailed arguments based on many Buddhist texts. So I would like to try to prove it more clearly and convincingly hereafter.

It is also noteworthy that Critical Buddhism has social-critical aspects. For example, social discrimination, Japan-centered ideology connected with Japanese militarism, and so forth, are also criticized. In this respect, it seems to me quite significant that a Korean translation of *Pruning the Bodhi Tree* will be published when, I think, the right-winged ideological tendency has seemingly increased in Japanese society.

The authors of the articles contained in *Pruning the Bodhi Tree* are not solely supporters of Critical Buddhism. Rather, Critical Buddhism is criticized therein sometimes vehemently by many authors. In this sense I think I can recommend the book to all readers who are interested in Buddhist philosophy. To deny or to affirm Critical Buddhism is secondary. First, it seems necessary at least to know the assertions of Critical Buddhism, even if they are sometimes discordant with traditional understanding of Buddhism.

以上が、三つの推薦文であるが、*Pruning the Bodhi Tree* の韓国語訳が今回出版されたことに関連して、私は韓国で「批判仏教」に対する関心が今も高いことに驚くのである。Swanson 教授の推薦文にも示されていたと思うが、韓国仏教では如来蔵思想が中心的役割を果たしてきた。如来蔵思想こそ韓国仏教の主流

であったと言ってもよい。その韓国で、如来蔵思想を非仏教的なものとする「批判仏教」や私の主張に対して、以前から大きな関心が寄せられてきたことを、不思議に思うのである。この点は、中国においても、同様である。これまで私は、韓国、中国、台湾の学会において、如来蔵思想に関して否定的な評価を示す発表を繰り返してきたが、そこで全面的な拒絶や非難という対応に出会ったことはない。むしろ反対に、強い興味を示す真剣な質問を相次いで受けたように思う。奇妙なことに、私にとっては、そこに非常に好意的な雰囲気すら感じられたのである。これは何故であろうか。

私は、如来蔵思想を主流とする韓国や中国の仏教に関わる仏教学者や仏教者が「批判仏教」に高い関心を払ってきたことの原因を、未だに理解できないのであるが、以下に、「批判仏教」に関する韓国や中国、更にアメリカの反応を、簡単に振り返っておきたい。これは、世界における仏教学の意義を考えるときに、全く無益ということにもならないであろう。

まず、「批判仏教」という語は、言うまでもなく、袴谷憲昭教授の造語であって、教授の著作である『批判仏教』（大蔵出版、1990年）において、Critical Buddhism という英語とともに、初めて使用され、提唱されたものである。私自身は、「批判仏教」という語によって、自らの立場を示したことはない。「批判仏教」という語によって表現される袴谷教授の主張は、『批判仏教』出版の時点で初めて述べられたわけではない。それ以前に、袴谷教授が『本覚思想批判』（大蔵出版、1989年）を出版されて、大きな反響を呼んだことについては、今更言うまでもないであろう。

私も、同じ年に、『縁起と空 如来蔵思想批判』（大蔵出版、1989年）を出版したが、私自身は、「批判仏教」の起点は、『本覚思想批判』に収録された「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」という論文を、袴谷教授が、1985年10月26日に、大阪の部落解放センターで発表された時点であると考えている。その後、翌年の6月14日、私は日本印度学仏教学会の学術大会で、「如来蔵思想は仏教にあらず」という論文を発表し、この論文は、『縁起と空』にも収録された。

また、1992年には、伊藤隆寿教授が、「批判仏教」の主張を基本的に承認されて、『中国仏教の批判的研究』（大蔵出版）を出版された。更に、少し年代は降るが、1997年には、石井修道教授が『道元禪の成立史的研究』（大蔵出版）を出版されたが、そこには、「批判仏教」の主張に関して、私見によれば、か

なり共感的な理解が示されているように思われる。かくして、駒澤大学の仏教学部は、「批判仏教」の「発信地」であるというような評価も受けるようになったが、その一連の「批判仏教」の「運動」が、海外で注目を集めるようになったのは、やはり 1993 年 11 月 22 日午前 Washington D.C. で行われたアメリカ宗教学会（The American Academy of Religion）の年次大会で、「批判仏教」に関するパネル“Critical Buddhism: Issues and Responses to a New Methodological Movement”が開かれたことが、大きな理由となっているであろう。

このパネルに関しては、拙稿“My Report of the Panel on “Critical Buddhism””（『駒澤大学仏教学部紀要』52, 1994 年）を見て頂きたいが、パネリストは、Sallie King（司会）、Jamie Hubbard, Nobuyoshi Yamabe, Steven Heine, Dan Lusthaus, Paul Swanson の諸氏、そして私であった。また、同日の午後には、いわば、この「批判仏教」のパネルに対抗する形で、「本覚思想」に関するパネルが開催された。パネリストには、Humihiko Sueki, Ruben Habito, Paul Groner, Jacqueline Stone, Masatoshi Nagatomi の諸氏が含まれていたが、このパネルに聴衆として参加していた私は、Nagatomi 教授から質問を受け、それに答える機会を与えられた。

この二つのパネルが話題を呼んだためか、Jamie Hubbard 教授と Paul Swanson 教授が編者となって、「批判仏教」のパネリスト等の論文を中心とし、袴谷教授と私の諸論文の英訳をも含めて、*Pruning the Bodhi Tree* を編集し、1997 年に出版された。

しかるに、これに先立って、上述のパネル開催の翌年の 1994 年には、韓国東国大学の慧諫 Hyewon 教授によって、拙著『縁起と空』が韓国語に翻訳されて、出版された。*Yeongi wa gong* (Unjusa, 1994) がそれである。これは、『縁起と空』全 8 章のうち、第 3 章と第 6 章を除いた他の 6 章を訳したものである。最初、この翻訳の計画を聞いたとき、私は、上述したような、如来蔵思想に対する韓国仏教の極めて肯定的な評価を念頭に置いて、かなり当惑したことを、憶えている。しかし、この訳書が大きな機縁になったためであろうか、私は、韓国の学会に繰り返し招かれることになった。

即ち、1996 年に東国大学校で開かれた The International Conference of Buddhist Studies, Commemorating the 90th Anniversary of Dongguk University で “Buddhism and Postmodernism” という講演をし、1998 年 8 月 22 日に白羊寺 Paekyang-sa で開かれた The International Conference on Sôn で、”Critical Considerations on Zen

thought”という発表をした。また、1999年12月18日にはソウルで、高麗大蔵経研究所主催による「批判仏教に関するセミナー」が開かれたが、そこで、私は、Critical Comments on Critical Buddhismという発表をした。さらに、最近では、2014年3月28日に金剛大学校で「仏性は靈性か」というテーマで開かれた印度哲学会の学術大会で、「仏性と靈性」という発表をした。

これらの発表や講演に際しては、現在は威徳大学校教授であり韓国仏教研究院院長でもある李泰昇教授に、通訳をして頂くなど一方ならぬお世話になった。心から御礼を申し上げたい。なお、金剛大学校の学会では、同大学校研究員の河榮秀氏にも、お力添えを頂いた。

また、「批判仏教」のテーマと直接に関係するものではないが、2008年には、拙著『チベット仏教哲学』（大蔵出版、1997年）が、李泰昇教授を中心とするグループ（Lee Taeseung, Kwon Seoyong, Kim Myeongu, Song Jaegun, Yun Jonggab）によって韓国語訳された。*Tibeteu Bulgyocheolhag* (Bulgyosidesa, 2008) がそれである。言うまでもなく、この拙著にも、如来蔵思想にたいする批判的な理解が示されている。

次に、中国への影響について言えば、2002年と2006年に、蕭平・楊金萍の両教授による『縁起と空』の中国語訳が、出版された。『縁起與空——如来蔵思想批判』（2002年、経要文化出版；2006年、中国人民大学出版社）である。2002年版は、繁体字であり。2006年版は簡体字である。いずれも、『縁起と空』全8章のうち、第3章・第4章の訳は含まれていない。

また、2004年には、伊藤隆寿教授の『中国仏教の批判的研究』が、やはり、蕭平・楊金萍の両教授によって、中国語訳されて出版された。『仏教中国化的批判性研究』（経世文化出版、2004年）がそれである。その出版の後のことだと思うが、2004年の11月6/7日に、北京の中国人民大学で、「本覚思想」をテーマに、第1回、中日仏学会議が開かれた。日本から参加した発表者は、末木文美士教授、菅野博史教授、花野充道氏、そして私であった。伊藤隆寿教授は、論文のみの参加となった。中国側の発表者としては、*Pruning the Bodhi Tree* の韓国語訳に、上掲の推薦文を寄せられた林鎮国教授も参加されていた。私は、「如来蔵思想と本覚思想」と題して発表したが、議論は盛況であった。中国側の発表者である周貴華教授が私の見解を批判する発表を行い、それに私が応答することもできた。

また、この学会で、中国側の発表者の一人である龔隼 Gong Jun 教授から、

Pruning the Bodhi Tree を中国語に翻訳する計画を進めているというお話しを伺った。実際、この計画は、2004年に、『修剪菩提樹 “批判仏教” 的風暴』（上海古籍出版社）の出版によって実現された。更に最近、2013年には、中国人民大学の張文良教授が、『“批判仏教” 的批判』（人民出版社）を著して、出版された。

ここで、英語圏への影響にもどれば、1997年に *Pruning the Bodhi Tree* が出版されて以降、この書の書評というべき review article が、1999年に、次のような形で発表された。

Jacqueline Stone, “Some Reflections on Critical Buddhism,” *Japanese Journal of Religious Studies* 1999 26/1-2.

著者の Stone 教授は、著名な本覚思想の研究者である。

また、1998年には、Joseph O’Leary 教授が、*The Hermeneutics of Critical Buddhism (Eastern Buddhist, 31)* を発表された。これらは、*Pruning the Bodhi Tree* の出版に直接に影響された論文と言えるであろうが、近年になっても、英語圏、特に米国の諸学者の間に、「批判仏教」に対する興味は、鎮静化してはしないようである。私自身は、Numata Visiting Professor としてシカゴ大学宗教学部に滞在していた2001年に、“Critique of Tathāgatagarbha Thought and Critical Buddhism” という公開講演を行った。また、1993年の「批判仏教」に関するパネルでも発表された Steven Heine 教授は、道元研究者という立場から、「批判仏教」に関して、次のような論文を公にされている。

“Critical Buddhism” (*Hihan Bukkyō*) and the Debate Concerning the 75-fascicle and 12-fascicle *Shōbōgenzō* Texts,” *Japanese Journal of Religious Studies*, 1994 21/1.

“After the Storm Matsumoto Shiro’s Transition from “Critical Buddhism” to “Critical Theology”,” *Japanese Journal of Religious Studies*, 2001 28/1-2.

また、最近になって、James Mark Shields 教授は、「批判仏教」に関する次のような著書を公刊された。

Critical Buddhism: Engaging With Modern Japanese Buddhist Thought, Ashgate Publishing, 2011.

本書に対しては、次のような書評が著されている。

Joseph S. O’Leary, “Review of James Mark Shields, *Critical Buddhism: Engaging with Modern Buddhist Thought*,” *Japanese Journal of Religious Studies*, 38, no. 2, 2011.

Ronald S. Green, “Review: *Critical Buddhism: Engaging with Modern Japanese*

Buddhist Thought”, *Journal of Buddhist Ethics*, 22, 2015.

Steven Heine, “Review: *Critical Buddhism: Engaging with Modern Japanese Buddhism*,” *Philosophy East and West*, 2015.

さらに、今年の10月9-11日に University of Pittsburgh ピッツバーグ大学で開かれる Mid-Atlantic Regional Association for Asian Studies の学会で、「批判仏教」に関するパネル“A Historical and Theoretical Reassessment of the Social Critique of ‘Critical Buddhism’ (Hihan Bukkyō)”が設けられる。パネリストは、Steven Heine 教授、Mark Shields 教授、Victor Forte 教授であり、Respondent は Linda Penkower 教授である。この内、Heine 教授の発表のタイトルは、“The Aftermath of the Storm Created by Critical Buddhism”である。

Shields 教授の著書の出版と Heine 教授の学問的貢献により、米国では「批判仏教」に関する議論が再び盛んになることが予想されるが、今回、*Pruning the Bodhi Tree* が韓国語訳されたことにより、韓国、あるいは中国でも、今後、議論が活発化することが期待される。(2015年6月26日)

これは、厳密には、海外における影響とは言えないが、2014年6月14日に国際日本文化研究センターにおいて、末木文美士教授のリーダーシップにより、シンポジウム「日本仏教批判」が開催されたことを付記したい。発表は、Shields 教授の「仏教と唯物論の再考」と松本の「京都学派の仏教理解について—批判的考察—」と Brian Victoria 教授の「護国仏教は仏教やいなや？」であり、佐々木閑教授によるコメントと全体討論と山田奨治教授による総括がなされた。司会は、末木教授と山田教授であった。Victoria 教授の *Zen at War* 『禅と戦争』は、「批判仏教」と関連して語られることがある。

(2015年8月26日、再校の日)